

2020. 10. 18 (日) マタイ 23 : 13 ~ 15

**23:13** わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々の前で天の御国を閉ざしている。おまえたち自身も入らず、入ろうとしている人々も入らせない。

**23:15** わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは一人の改宗者を得るのに海と陸を巡り歩く。そして改宗者ができると、その人を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのだ。

<説教>

本日の箇所の前のところ(23:1-12)イエスは、律法学者やパリサイ人たちについて「彼らの行いをまねてはいけません。」と「群衆と弟子たち」に対してお語りになりました。

「すべて人に見せるため」という彼らの行い(律法の行い、善行、祈り、断食、施しなど)の(悪しき)動機をもイエスは明らかになさいました。

そして「あなたがたのうちで一番偉い者は皆に仕える者になりなさい。だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。」と、イエスに従い、イエスから学び、イエスに倣うようにお語りになりました。

もうだれもあえてイエスに質問しようとしなくなった(22:46)律法学者やパリサイ人たちでしたが、イエスが群衆や弟子たちにお語りになったその場にはまだいたのでしょう。

そしてイエスを捕らえ、訴える機会をうかがっていたことでしょう。

そんな律法学者やパリサイ人たちに向かってイエスは7回も(別の写本によれば8回も)「**わざわいだ**」と言って、彼らの教えと行いそして内側にある「偽善」、罪を明らかにし、また審判を宣告なさったのです。

**23:13** わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々の前で天の御国を閉ざしている。おまえたち自身も入らず、入ろうとしている人々も入らせない。

「**わざわいだ**」と訳された言葉は、11章ではイエスが力あるわざを数多く行ったのに悔い改めなかった町々(コラジン、ベツサイダ、カペナウム)をお責めになった(20-24)場面では「ああ」(11:21)と訳されていました。

また18章では、人につまずきをもたらす者(罪を犯させる者)について「わざわいせず」(18:7)と断じておられました。

またこの後にはイエスを裏切るイスカリオテのユダについても「わざわいせず」(26:24)と言われます。

このように、イエスが発せられる「**わざわいだ**」という言葉は単なる腹立ち、怒り、罵りと言うよりむしろ義なる神の罪に対する、悔い改めない者に対する大いなる嘆き、そして審判の言葉なのです。

なお、「**わざわいだ**」と正反対の言葉は山上の説教等でお語りになった「幸いです」という言葉でしょう。

山上の説教のときは、人間の目や考えではとても幸いだとは見えず思えない人々に向かって「幸いです」とイエスは言われたのでした。

しかしここでは、人間の目には「わざわいだ」とは見えない人々、むしろ信仰深く見え、立派に見え、人から褒められ尊敬され畏敬の念をもって見られているという意味では“幸いな”人々、「**律法学者、パリサイ人**」に向かってイエスは「**わざわいだ**」と言われたのです。

なぜ彼らは「**わざわい**」なのか。

それは、彼らは「**天の御国**」に「**自身も入らず、入ろうとしている人々も入らせない**」から、「**人々の前で天の御国を閉ざしている**」からでした。

イエスご自身が「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」との宣言をもって宣教を始められました(4:17)。

そのように、生ける神の子キリスト・イエスに全く信頼し、依り頼んで、イエスを通して神に向かって、神のもとに立ち返り悔い改めて、神の御支配に全く服従することこそが人の幸いなのです。

「わたしは門です。だれでも、わたしを通して入るなら救われます。」(ヨハネ 10:9)

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」(ヨハネ 14:6)

こう言われたイエスが「**人々の前で天の御国**」を開くためにこの世に来られたのです。

しかし、まず彼ら自身がイエスを「生ける神の子キリスト」とは絶対に信じませんでした。

ルカの福音書には、「**わざわいだ、律法の専門家たち。おまえたちは知識の鍵を取り上げて、自分はず、入ろうとする人々を妨げたのだ。**」(ルカ 11:52)とイエスが言われたと記されています。

彼らはイエスがどういうお方か正しく知ろうとしませんでした。

イエスのみことばを素直に聞き、みわざを素直に見れば、イエスが「**神の御霊によって悪霊どもを追い出している**」と認めて、イエスによって「**神の国**」が自分たちのところに来ている(12:28)ことを正しく知ることができたはずでした。

イエスが「**生ける神の子キリスト**」であると知って、そのイエスについての正しい知識に基づいてイエスを信じるべきでした。

しかし彼らはそうしませんでした。

それどころかイエスに敵対して、「**この人が悪霊どもを追い出しているのは、ただ悪霊どものかしらベルゼブルによることだ**」(12:24)とさえ言い張りました。

そうやってイエスを世にお遣わしになった天の父なる神に逆らい、イエスに逆らい、彼らの心に「**このイエスこそは神の約束であり、あなたがたが待ち望んでいたメシヤ、キリストである**」とお語りになる聖霊に逆らい続けていたのです。

それだけでなく、他の人々にもイエスについて殊更に悪く、間違っことを言いふらして教えて、他の人々もイエスを信じないように、熱心に全力を尽くしていたのです。

少しでもイエスに心引かれているような人々には、「**おまえたちまで惑わされているのか。議員やパリサイ人の中で、だれかイエスを信じた者がいたか。**」(ヨハネ 7:47-48)と言っていました。

そのように、自分たちと同じようにイエスを信じないことが良いこと正しいことだと教えていました。



たのです。

せっかく聖書に、唯一真の神に、その教えに関心を持ち、また罪を覚え、良心の痛みを覚え、真理を求めるようになった異教徒が（ユダヤ人でも同じですが）イエス・キリストを正しく知るようにさせない、むしろキリストに出会うのを邪魔し、キリストから遠ざけてしまったのです。

また彼らがあらゆる犠牲を払って、あらゆる手段を用いて、熱心に「**改宗者を得る**」のはそれもまた「人に見せるため」に違いありませんでした。

神の栄光を求めて、人々の幸いのため、神に喜ばれるためではありませんでした。

そうではなくて、やっぱり「あの人たちはよく伝道している立派で信仰深い人だ」という人の評判、名声を得たいがためでした。

そして「**改宗者**」には神の方を向くのではなく、自分たちの方を向くことを求めたのです。

つまり「**改宗者**」から「先生」「父」「師」と呼ばれ崇め奉られ、仕えてもらいたかったのです。

神に聞き、神に従う神のしもべではなく、自分たちの教え・言い伝えに聞き従うパリサイ派のしもべ、自分たちに倣う立派な律法主義者になるように「**改宗者**」も教育して行ったのです。

そうやって「**律法学者、パリサイ人**」は人からの栄誉を求め、得てもいたでしょうが、イエスの審判によれば彼らは「**ゲヘナの子**」「**地獄の子**」でした。

彼らは天の父なる神の、イエス・キリストの御意思（みこころ）を行っているのではなく、彼らの父である悪魔の意思を行っていたのでした（cf.ヨハネ 8:44）。

それもすべては彼らがイエスを知ろうとせず、生ける神の子キリストと認めず、イエスに心を閉ざし、イエスを信じず、悔い改めなかったからです。

それゆえ彼らは「**人々の前で天の御国を閉ざす**」ほかなかったのです。

とすれば、今や私たちのまずなすべきことは明らかです。

それは主イエス・キリストがどんなお方か正しく知り、信じることです。

そして「神さま、罪人の私を主イエス・キリストのゆえにあわれんでください。」（cf.ルカ 18:13）と言って神に委ね、神のご支配に従うことです。